

精神感動ノ食欲ニ及ボス影響ノ試験的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38483

十全會雜誌

（第五拾貳號）

原著及實驗

○精神感動ノ食慾ニ及ボス影響ノ試験的研究（附、四表）

（明治四十一年五月廿三日十全會講話大會講演）

特別會員 佐々木 達

（澤 金）

食慾ノ精神機能ト關係ノ存スルハ日常吾人ノ經驗スル所ナリ、換言スレバ直接食物ヲ食セザルモ食慾ハ發動シ得ルモノトス、例之空腹時ニ食物ヲ見ルモ亦之ヲ嗅グモ食慾ハ發動ス、然ノミナラズ單ニ食物ノ想像ニ由テモ食慾ハ發動スベシ、故ニ食慾ハ腦ノ知覺性中樞ノ興奮ニ由リテ發動シ、其刺戟ハ直接消化機官ニ關係ナク他ノ求心的刺戟即チ視神、嗅神等ノ刺戟ニ由テ食慾ハ發動スルモノト云ハザル可カラズ。

斯ノ如ク腦ノ皮質ガ食慾ヲ誘導スルノミナラズ尙此食慾ニ基テ發動スル胃液ノ分泌ヲ調節スル機能モ亦此皮質中ニ存在スル事ハ動物試験ニ由テ証明シ得ルモノトス。

今犬ニ人工胃瘻ヲ造リ尙其食道ヲ頸部ニ於テ切斷シ其兩端ヲ外方皮膚ニ縫合ス、然ル時ハ口腔ト胃ノ交通ハ全ク

遮斷セラレ犬ノ口内ニ來ル食物ハ悉ク食道上口ヨリ排除サレテ毫モ胃中ニ來ルコトナシ、此人工胃瘻ト食道切斷ヲ合併シタル犬ヲ空腹トナシ、之ニ肉ヲ與ヘズシテ單ニ之ヲ示ス時ハ犬ハ盛ニ之ヲ渴望ス、此試驗ヲ行フ事五六分ニシテ人工胃瘻ヨリ胃液ノ分泌ヲ始ム、此流出ハ犬ノ渴望甚シキニ從テ益々盛ナリ、次デ此肉ヲ直接犬ニ食セシムルニ、其肉ハ一ツモ胃中ニ來ラズシテ悉ク食道上口ヨリ排出スベシ然モ尙五六分時ニシテ胃液ハ盛ニ分泌ヲ始メ、已ニ其肉ガ口内ニ全ク消失シタル後モ尙久シク其分泌ヲ持續ス、之ヲ擬食試驗(Schein-fütterung)ト稱ス。

抑モ此試驗ハ Pawlow 氏ノ行ヒタル法ニ係リ余モ亦此試驗ヲ試ミ全一ノ成績ヲ得タリ、加之、尙ホ人類ニ就テモ全一ノ試験ヲ試ムル事ヲ得タリキ、即チ該患者ハ實扶帝里後ノ癥痕ノ爲メニ食道ノ閉塞ヲ起シタル者ニ人工胃瘻ト食道瘻ヲ造リタル小兒ニシテ此小兒ノ好ム食物ヲ以テ擬食試験ヲ行フ時ハ胃液分泌盛ナルモ、好マザル食物ナレバ其分泌少キコトヲ實見セリ。

以上ノ試験ニ由テ精神機能ガ食物消化ニ對シ如何ニ大ナル關係ヲ有スルヤハ明ナリ。

食慾ガ諸種ノ精神感動ニ由テ變化スル事モ日常吾人ノ經驗スル所ニシテ、例之心痛、憤怒ノ如キ突然食慾ヲ減少セシムルコトハ能ク人ノ知ル所トス、殊ニ神經ノ過敏ナル者ニ著明ナリ、例之神經衰弱症ノ如シ、然ノミナラズ此精神感動ニ由テ胃腸ニ眞性ノ疾病ヲ發スルコトモ鮮カラズ。

然ルニ此關係ニ對スル詳細ノ説明未ナシ、少クモ此問題ニ對シ試験的研究ヲ行ヒタルモノナシ、余ハ此關係ヲ憤怒シ易キ犬ニ就テ研究セリ、且此犬ヲ興奮セシメンガ爲ニ猫ヲ使用シタリ。

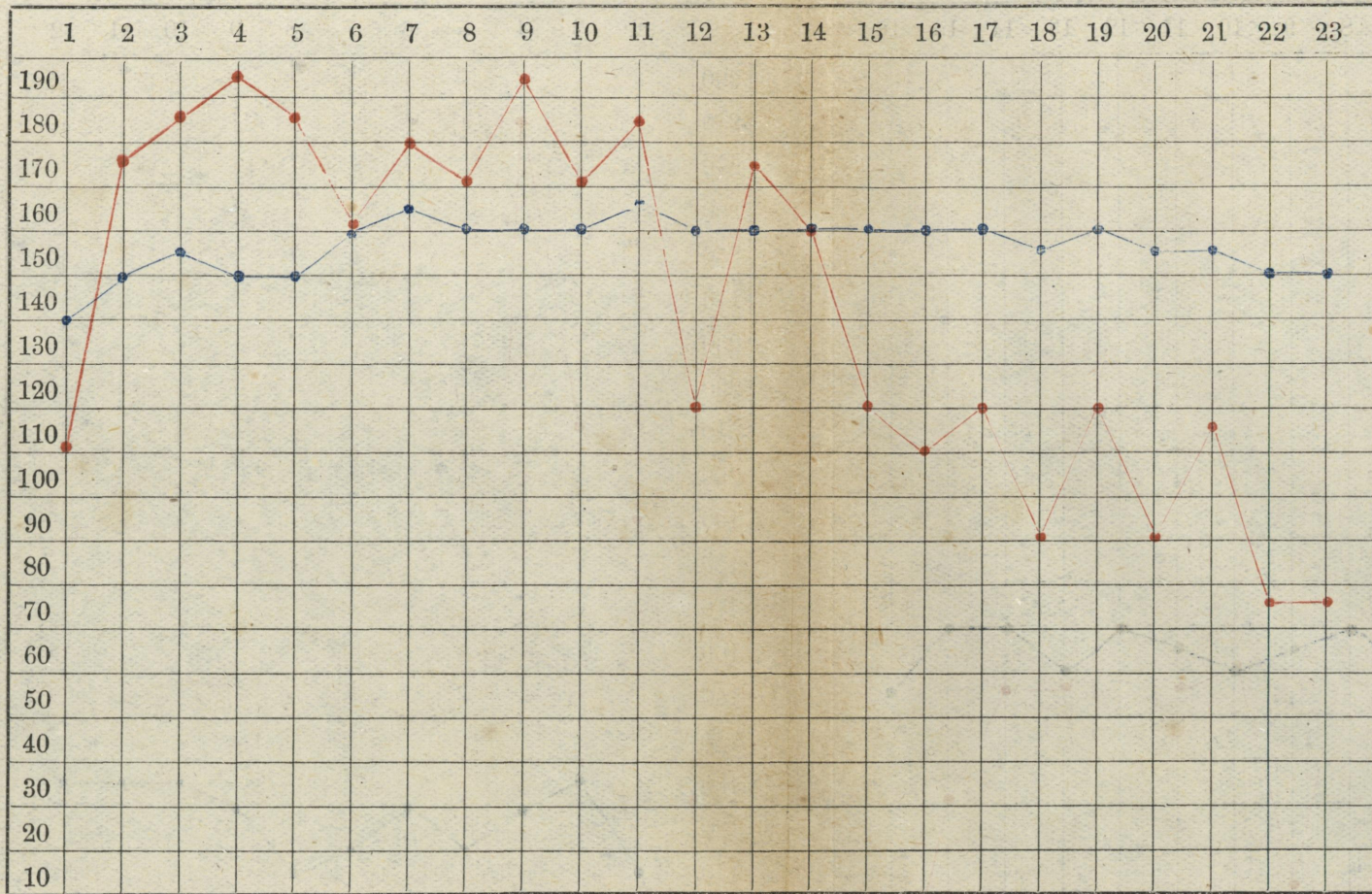
先ツ犬ヲ繫キ自由行動ヲ妨ゲ置キ猫ヲ金屬ノ籠ノ中ニ入レ試ニ此犬ヲ煽動セシムルニ犬ハ直ニ猫ヲ捕ヘントス、然レモ自家ノ行動自由ナラザルト籠ノ爲ニ妨ゲラレ、犬ハ籠ヲ咬ヘテ振り廻セバ猫亦怒テ毒氣ヲ吐キ犬ト戰フ、然

第一表

單純擬食試驗

五分間持續

第二表

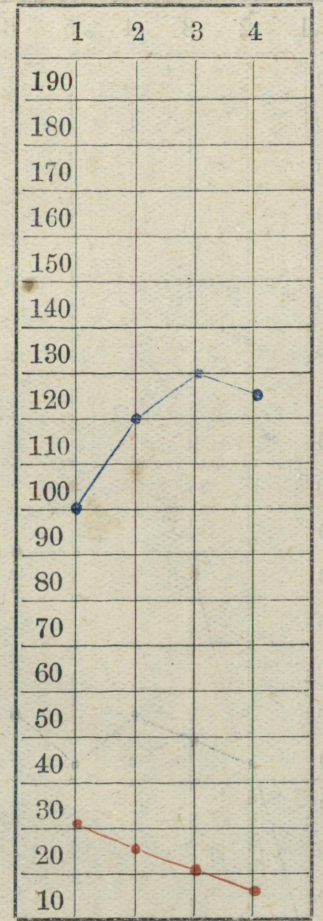


每五分時間胃液分泌量 總酸量

左側數字：赤線ニ對シテハ每五分時分泌量 C. Cm. ノ十倍

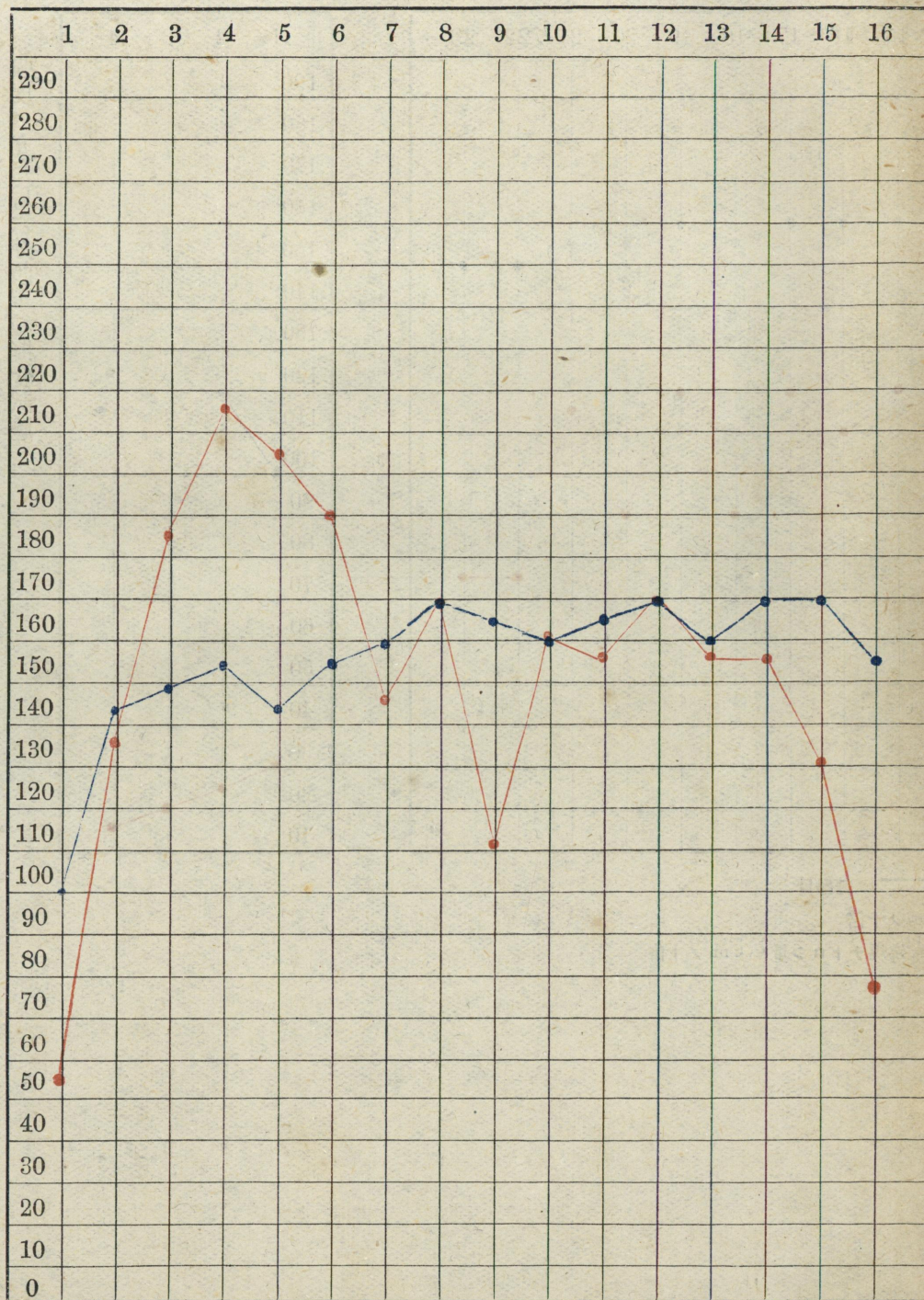
青線ニ對シテハ總酸量ヲ中和シタル $\frac{1}{10}$ 定規ナトロン量 C. Cm. ノ十倍

上側數字ハ每五分時胃液採取ノ順序



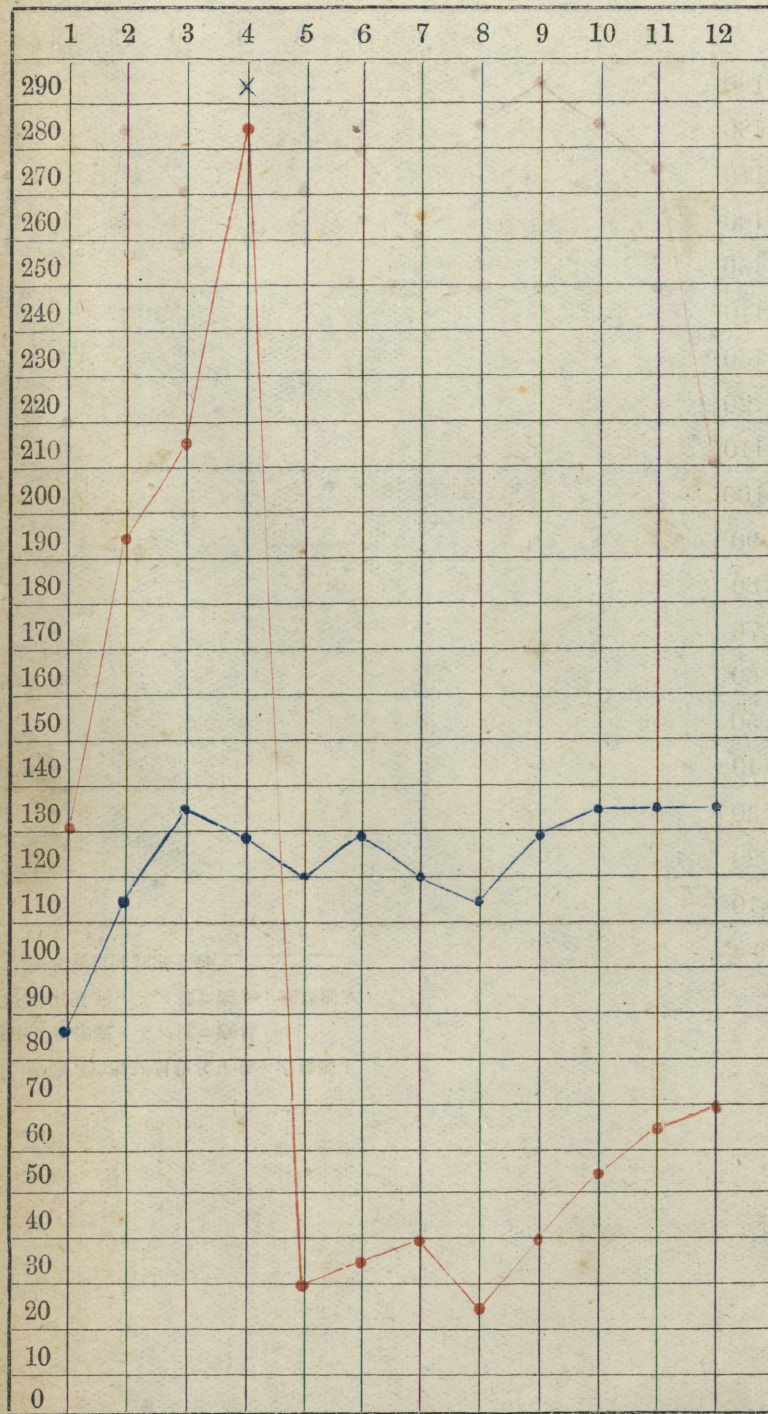
強度ノ亢奮后六分間單純擬食試驗

第三表 食鹽水 300 c. cm. 應用後 擬食試驗五分時間



— 每五分時胃液分泌量 — 總酸量

第四表 第三表試驗二十分后ノ亢奮試驗五分間(x)



— 每五分時胃液分泌量 — 總酸量

ル時ハ犬ハ益々怒テ嚙ミ付カントスルモ自由ナラズ、自由ナラザレバ益強ク激憤ス、此強度ノ興奮時ニ於ケル胃液分泌ノ關係ヲ検査セリ。

先ヅ順序トシテ此犬ニ人工胃瘻ト食道切斷ヲ行ヒ、最初對照試驗トシテ空腹時ニ五分間擬食試驗ヲ行ヒ、次デ五分間宛ノ分泌液ヲ採取シテ鹽酸ノ含量及蛋白消化力ヲ検査セリ、然ルニ已ニ二十分間ニシテ胃液六六、二c.c.ヲ得、尙其分泌ハ二時間以上持續シ全量二六四、五c.c.ニ達シタリ。(第壹表參照)

次デ翌日同一ノ犬ノ空腹時ニ五分間猫ト戰ハシメ、多少安靜ニ復シタルヲ待テ五分間ノ擬食試驗ヲ行ヒ、次デ五分間毎ニ胃液ヲ採用セリ、此際犬ハ前日ノ如ク能ク此肉ヲ食セシニ拘ハラズ胃液ハ殆ンド分泌スルコト無ク二十分間ニシテ其全量僅ニ九c.c.ニ過キザリキ。(第貳表參照)

此比較試驗ノ成績ヲ以テ見レバ強度ノ精神感動ハ胃ノ分泌神經ニ變調ヲ與ヘ、爲ニ食物攝取ト共ニ發動スル神經機能ハ最早健常ノ分泌機能ヲ喚起スルニ足ラザルモノト言ハザル可カラズ。

次ニ起ル問題ハ既ニ分泌ヲ始メタル後ノ經過中ニ於テモ此精神感動ガ尙其分泌ヲ抑制スルヤ否ト云フ点ナリ。

此問題ヲ決スルニハ最初定期ノ擬食試驗ヲ行ヒ胃液分泌ノ一定度ニ達スルヲ待テ猫ト戰ハシメ爾後ノ分泌量ヲ測定スレバ明ナリトス、余ハ擬食試驗後二十分ニシテ犬ヲ猫ト戰ハシメタルニ其後ノ十五分間ニハ僅カニ數滴ノ胃液ヲ得ルニ過キザリキ、尙ホ此試驗ヲ一層明瞭ナラシメンガ爲メ次ノ法ヲ取レリ。

擬食試驗前ニ稀薄ノ食鹽水ヲ與フレバ其分泌ノ一層盛ナル事ヲ他ノ試驗ニテ知レリ、先ヅ三〇〇c.c.ノ食鹽水ヲ瘻孔ヨリ胃中ニ注キ之ヲ閉鎖シ十五分間ノ後瘻孔ヲ開キ食鹽水ヲ流出セシメ尙ホ胃中ニ殘存セル部分ハ脫脂綿ヲ以テ拭ヒ、次デ五分間ノ擬食試驗ヲ行ヒ、前法ノ如ク胃液ヲ採取セシニ其成績ノ顯著ナルコト(第三表)ノ如シ。

次デ翌日全一ノ方法ヲ以テ食鹽水應用後擬食試驗ヲ行ヒ二十分ニシテ分泌量ガ一定度ニ達シタル後五分間猫ト戰ハシメテ犬ヲ興奮セシメ次デ五分間毎ニ分泌量ヲ測定セシニ驚ク可キ減少ヲ示セリ、即チ興奮直前五分間ノ分泌量ハ二六五^{c.c.}ナリシモ興奮後ノ五分時間ニテ頓ニ減少シ僅ニ二二^{c.c.}トナレリ、(第四表參照)

此比較試驗ノ成績ニ由テ觀レバ已ニ盛ニ發動シタル分泌機能モ亦精神感動ニ由テ過大ノ抑制作用ヲ蒙ル事明瞭トナレリ。

以上ノ試験的研究ニ由テ精神の感動ノ食慾ニ及ボス影響ノ如何ニ大ナルカナ知ルノミナラズ、胃液分泌ハ胃粘膜ニ對スル食物の刺戟ノ有無ニ關セズ單ニ精神の機能ノミニ由テモ左右セラル、コト明ナリ、從テ胃病療法トシテ精神療法ノ必要ナル事明白ナリ、亦試驗食モ其種類ニ從テ即チ患者ノ嗜好如何ニ從テ胃液分泌ニ差異アルコトヲ考察セザル可カラズ。

○肥大性脊髓硬膜炎ノ一例

(明治四十一年五月廿二日本會講話部第八回大會講演)

特別會員 勝 木 直 吉

(縣川石)

本病ハ千八百七十一年ニ Charcot 初メテ肥大性頸部脊髓硬膜炎 Pachymeningitis cervicalis hypertrophica ト名ケ特別ノ疾患トシテ報告シ爾后其門下 Dr. Joffroy 氏本病ニ就テ詳細ニ記載セシモノナリ蓋シ本病ハ殊ニ頸部膨大ノ下半部ニ限局シテ來ルコト多キニヨリ此名稱ヲ付シタルナリ